

学生の姿から考察する絵本の効果

——保育者養成校授業でどのように使用するべきか——

三 好 伸 子

Effects of Picture Books that can be Considered from Students: How Should We Make Use Picture Books at the Nursery Teacher Training Class

MIYOSHI Nobuko

Abstract : I considered about the interview with students in a nursery training school and the exercise contents of the class of the study of childcare contents. This purposes were to reveal effects of picture books from students and to search prospects and challenges of classes at nursery training school after learning the interests of picture books which students have or processes of learning.

As a result, the prospects and challenges that has been revealed are as follows.

- ①Picture books have effects of reconsidering the meaning for you and your listeners and deepening self-reflection or understanding of children.
- ②Student's interests are various.
- ③In the process of student's learning, I got the outlook and challenges to the class.

Key Words : Picture Book, Students Interests, The Nursery Teacher Training Class, Storytelling

要旨 : 保育者養成校の学生へのインタビュー内容と、「保育内容の研究（言葉）」授業の演習内容について考察した。目的は、学生がもつ絵本への興味や学びの過程について知り、学生の姿から絵本の効果を明らかにすることと、保育者養成校の授業内容の展望と課題を探ることとする。

その結果として、①学生の読み聞かせの後に絵本の読みなおしを行う姿から、絵本は、「対象者」と「自分」にとっての意味を考え直し、子ども理解や自己省察を深める効果があること、②学生の絵本への興味・関心は多様にあること、③学生の学びの過程から授業への展望と課題が明らかになった。

キーワード : 絵本, 学生の興味, 保育者養成校授業内容, 読み聞かせ

1 背景と問題意識

(1) 保育・育児場面における絵本の位置

子どもが育つ環境に絵本が用意され、活用されていることは保育関係者には周知のことである¹⁾。絵本の「読み聞かせ」についても、「視覚に頼らず自分の心の中に自由にイメージを膨らませていくことができるよう、語りや読み聞かせを取り入れていくことも大切²⁾

と視聴覚教材では担いきれない効果と重要性が保育所保育指針に述べられている。さらに、「ブックスタート³⁾の影響や、商業効果もあり、家庭や保育現場での子育ての場面において、絵本はいいものであるという意識は、現代の保護者や子育て支援者に一般的に浸透し、多様な絵本の社会的活用⁴⁾が試みられている。

(2) 保育者養成校の指導内容と保育現場の実際を見聞きする学生の混乱

松居 (2002) は、絵本を読む意味について、「絵本の読み手は、言葉の芸術家が選び抜いた言葉、練り上げた文体、精魂を傾けて構成したすばらしい言葉の枠とイメージの結晶をわがものとして子どもに伝え、最高の言葉の体験を送ることができる」と述べている。

しかしながら、保育者養成校 (以下養成校と記す) における授業内では、時間的制約があったり、横山 (2004) の述べる「読み聞かせの熟達化」⁹⁾の過程に沿って授業計画がなされたりするため、学生への指導内容は、絵本の読み聞かせの基本的技術の指導から始まり、その内容にとどまっている場合もある。

基礎的技術の内容について述べる。横山 (2004) は、「いつ、どこで、どのような位置に座って、読むかという設定が重要であること、また、興味関心が異なる複数の幼児が最後まで絵本に集中できる環境の構成」⁶⁾などが重要だと述べている。加えて、近藤ら (2006) が「絵本を読むという実践においては『読み聞かせの場面づくり』『導入』『読んでいくうえで』『読み終わった後で』の4過程を重視している」⁷⁾と述べている。横山 (2004) の述べる環境の構成や、近藤ら (2006) の述べる4過程に沿った絵本を読む際の留意点や、対象の子どもの年齢や読み聞かせの季節などへの留意点などが基礎的技術として、学生へ指導される主な内容である。

加えて上記のような基礎的技術が養成校で指導されている背景の一つとして、保育実習場面においては、絵本の読み聞かせは多く取り入れられており、実習生の役割としても体験しやすいことから、勧められる場合が多いことがある⁸⁾。しかしながら、保育現場の読み聞かせの現状の一つとして、「保育者や園によって場つなぎや時間つぶし、季節や行事を意識させる刺激に留まる場合も少なくない」(塚本ら, 2014)⁹⁾場合や、保育現場での読み聞かせ以外の活用方法¹⁰⁾も見受けられる。さらには、保育者によっては、「絵本は読むだけだから簡単すぎる」という理由で、絵本以外の設定保育を実習生に求めることもある。

以上のような保育現場での絵本の活用の実実際を見聞きしたり、体験したりする学生にとっては、「絵本は手軽に実施できる簡単な教材」なのか、それとも前述した松居 (2002) の「言葉の芸術家の最高の結晶を子どもたちにわがものとして伝える」行為であり、「価値ある文化財なのか」と混乱する一因になる場合がある。筆者は、基礎的技術の習得と、絵本そのものに焦

点を当てる学習とをカリキュラム構成上で整理して指導する必要があると考える。

本所属校内では、保育現場で実施されるとの多い「集団読み聞かせ」時の読み手の形式的な表現技術 (持ち方や読み方など) は、「保育実習指導」内での講義や、「特別講座」として学生へ指導が行われている。そのため、本対象授業内では、学生が1冊の絵本とじっくりと向き合い、子どもにとっての絵本の意味を学ぶと同時に学生にとっての絵本の意味を探ることに重点をおいた。

(3) これまでの研究経緯と本研究で目指す学生の姿

筆者はこれまで、養成校での「障害児保育」「乳児保育」授業内において、絵本の読み聞かせを含めた絵本を用いた授業方法を実施してきた。その効果は、伊藤ら (2013) が「養成校教育における『読み聞かせ』の教育的意義」として述べている2点と同様にあると考えている。それらは、「読み手の教師の感動を学生が受け取る」ことと、「読み聞かせを通して学生が間接体験を多くできる」¹¹⁾ことである。

つまり、「障害児保育」「乳児保育」は、どちらも、学生が対象者に直接出会う体験が不足しがちな科目である。そこで、対象者や周囲の人たちの心情やかかわり方を学ぶためにも、教師の保育観や、障害観などを伝えるためにも、学生が主体的に学ぶためにも、絵本を用いる学習が有効だと考えている¹²⁾。

それら考え方から、本研究対象授業内では主体的に学習を進め、絵本への興味関心の方向性を知り合い、学び方を含めて絵本を読むという体験を重視し、学生の等身大の学びから意味づけ合う姿を目指している。

2 先行研究概要と本研究との関連性

(1) 「読み聞かせ」についての整理

読み聞かせという言葉について整理する。絵本は、松居 (1987)¹³⁾は、「大人が読んで聞かせるもの」という主張をする。「語り手が、感動し、共感している絵本は、語り手がよく理解し心の中に豊かなイメージが出来上がっているほど、聞き手にそれは伝わり、聞き手の理解を深め感動や共感を呼び起こす。これは、語り手と聞き手の基本的関係です」¹⁴⁾と述べている。

また、伊藤ら (2013) は、保育者養成教育分野における「読み聞かせ」は、「保育者が子どもに絵本を読み聞かせることを意味している」¹⁵⁾と定義している。集団への読み聞かせの研究もおこなわれており、小松

崎（1998）は、子どもが読み聞かせにより、「顔を見合わせ」る行為などをとらえて、「連帯感が漂う」¹⁶⁾としている。近藤（2006）は、「保育の現場などにおける集団の読み聞かせは、その発達の特徴により、5歳半ごろからが1つの重要な時期になるものと考えられる」¹⁷⁾と述べている。

今後、対象年齢の違いによる読み聞かせについて、保育の実際と合わせた詳細な検証が必要だと筆者は考える。本研究ではその検討はできていないため、対象年齢（子どもへか、おとなへか）や、読む場所（保育現場か家庭内かなど）については考えず、「声を出して絵本をよむこと」として研究を進めた。

(2) 多面的な先行研究概要と本研究の独自性

絵本の読み聞かせの方法と効果についての先行研究は、読後の読み手の問いかけに関するもの（松村，2014）¹⁸⁾や、電子絵本との比較（佐藤ら，2013）¹⁹⁾や、「読み手が感動した絵本、その本のおもしろさ、楽しさ、悲しさ、悔しさ、怒り、恥ずかしさなどを伝えてほしい」と読み手の留意点を述べているもの（桑葉，2010）²⁰⁾などがある。他にも読み手の声に関するもの（佐々木ら，1994）²¹⁾や、母子の相互作用に関するもの（菅井，2008）²²⁾など、多くの側面から行われており、社会が必要としている議論が起きているといえる。

永田（2016）は、絵本を読む対象者が、子どもだけではなく、大人にも広がっていることなどから、現代は「絵本の総活用時代」であり、絵本の多面的活用の要因として、「①作り手のメッセージが存在する点、②メッセージが、「ことば」と「絵」と「形態（本という構造）」とで表現される点、③紹介する、読むなどして、「媒介者」が存在する点（特に乳幼児・児童に対して）」の3点を挙げている²³⁾。

杉本（2016）は、保育学生が「すぐに役立つ How-to の習得に目を向けがちな傾向に危惧を覚え」、6冊の絵本に向き合う授業を展開した。その学生の「絵本の探求には体力がいる」²⁴⁾というコメントは、教材研究を深く体験するからこそそのリアリティがある。前述の永田の言う「媒介者」としての役割は、杉本が言う How-to の習得では、絵本のメッセージの媒介者にはなれないのではないかと筆者は考える。

杉浦・清水（2014）は、「1度目は自分が子どものとき、2度目は子育て中、3度目は学生時代、4度目は年齢を重ねると、4度楽しむことが大切になっているのが今の時代のように思える」²⁵⁾と述べ、言葉の使用が減少した学生たちの様子を述べている。

また、実習や就職に役立つ養成校授業内容を導き出した（藤重，2012）²⁶⁾研究もある。基礎的技術の獲得による学生の保育者としての自信の確立効果や学習意欲の向上などの検証も必要であるが、本論では養成校と保育現場実習との両方から学ぶ学生の意識に焦点を当てていくことを目指す。

以上のように、絵本が子どもの発達や社会の中で様々な活用されていることを示す報告や、養成校における指導方法や、読み聞かせの技法の研究は実証されているが、養成校の学生の側から考える絵本の意味、効果については、具体的に言及されていないと考える。

3 研究目的

保育者養成においての絵本の使い方と効果を探り考察することを長期的な目的とするが、本研究では、実習後の学生へのインタビュー調査結果と、保育士資格、幼稚園教諭免許状の取得のために必須科目である「保育内容の研究（言葉）」の授業内での演習に焦点を当て、学生の学び（過程と成果）から、絵本の読み聞かせの学生にとっての意味を探ることと、授業・演習内容方法の意味づけと課題を明らかにすることを研究目的とする。

4 研究方法と倫理的配慮

(1) 保育実習後の学生へのインタビュー調査（A 保育者養成施設2回生）：対象者・時期・倫理的配慮・分析方法

A 保育者養成校（2年制養成課程）の学生へのインタビュー調査（1時間）を実施した。インタビュー時期は、平成28年9月である。対象者は、2回生の明さん（仮名）である。明さんは、教育実習Ⅰ・Ⅱ（幼稚園）、保育実習Ⅰ（保育所・福祉施設）、保育所実習Ⅱを経験済みである。明さんの実習（平成28年8月後半から2週間・3歳児クラス）における体験についての語りをナラティブ・アプローチにより分析した。明さんには、個人情報の保護を説明し、論文発表、学会発表等の承諾を得た。

(2) 授業内演習課題をデータとした調査（B 保育者養成校3回生及び4回生）：対象者・時期・倫理的配慮・分析方法

平成28年度4月～7月開講授業の「保育内容の研

究 (言葉) 受講者 123 名を対象とした²⁷⁾。受講者の多くが、保育実習 I (保育所・福祉施設) の実習経験がある。学生に対して授業内に、個人情報の保護を説明し、論文発表、学会発表等の承諾を得た。

学生への演習課題は、①2 名~3 名が 1 組となり (学生が組と発表の順番を設定した)、絵本に関して「学びたいこと」についてテーマを設定し、②20 分以内で、③学習目的と考察を明確にして友達に発表するというものである。15 回の授業の内 7 回を発表にあてた。全授業終了時に提出した課題レポート「発表内容と再考察について」、「友達の発表内容について」をデータとして、カテゴリーに分けて分析し考察した。

5 結 果

(1) 明さんの読んだ絵本と本論で取り上げた絵本

明さんは、実習前のオリエンテーションにおいて、保育者から「何でもいいから絵本をたくさん読んで」と言われ、実習前に自宅近くの図書館で以下の 6 冊の絵本を借りた。明さんは、タイトルと表紙を見て、「夏らしい (実習時期と合う)」、「簡単そう (3 歳児が理解できる)」、「面白そう」という 3 つの理由で選び 6 冊全てを読んだ。

表 1 明さんが選び実習で読んだ本

① 「みなみのしまのサンタクロース」 ²⁸⁾
② 「ルナーおつきさんのおそうじや」 ²⁹⁾
③ 「まてまて! きつねのおめん」 ³⁰⁾
④ 「そらいろのたね」 ³¹⁾
⑤ 「花火の夜に - ARTBOX 絵本新人賞」 ³²⁾
⑥ 「はらっぱむらのなつまつり」 ³³⁾

本論で取り上げた絵本は以下である。

「みなみのしまのサンタクロース」

【場面数】

見開き 1 場面として、16 場面。

【ストーリー】

アロハシャツを着たサンタクロースが、カンガルーの引くソリに乗り、コアラとプレゼントを配る物語である。

(2) 絵本の読み聞かせ場面の振り返り

明さんは、子どもたちの前で絵本を読んだ際の自分の姿を振り返り以下のように語った。

(語り 1) 「直前にもう一度読んで焦った」

「みなみのしまのサンタクロース」を子どもの前で読む直前に「もう一度、ちゃんと読んでおこう」と思って自分で読んだんです。そうしたら絵本の最後の文章が、「メリー・クリスマス」だとわかって、時期的に、この絵本は、クリスマスの時期に読むものなのだろうかと焦ったんです。だから、最後の「メリー・クリスマス」を言わずに終わりました。

(語り 2) 「三歳児は、集中して絵本が見られるんだ」

今思えば、やっぱり夏の本だったのかなと思う。子どもたちの反応は良かった。集中して聞いていた。読みながら、ナレーションばかりの本だなと思った。もっと会話があったほうが、読みやすかった。下読みのときは、パラッと見ただけだったから、わからなかったんです。3 歳児は、絵本があんなに集中して見られるんだなとわかった。

(語り 3) 「今度読むときは」

(改めて絵本を見直して) オーストラリアの絵本だったんだ。だから、カンガルーなんだ。今度は、地球儀を見せてから読んだらいいと思う。

(3) 学生の発表内容

発表内容結果 (全発表件数: 62 件) を、絵本の効果と絵本への興味と大分類し、さらに小分類を行った。(表 2) 学生が使用した主な絵本総数は、59 冊である。

表 2 学生発表の分類

番号	調査組数	大分類	小分類	内容
1	16 組	効果	子どもに向けての絵本① (自分も一緒に考えたい)	命・愛・戦争・犯罪・差別用語・人との違い・いじめ・けんか・食物連鎖・道徳教育・自己表現・障害児保育・自尊感情・親のいない子ども
2	13 組	効果	子どもに向けての絵本② (特定の場面での教材として使用)	わらべうた・ダンス・英語教育・バイリンガルブック・生活絵本 (片づけ、行事、午睡、おつかい、食育)
3	5 組	効果	大人に向けての絵本	親子の交流・保護者支援・愛とは・大人になって絵本を読み返す意味
4	9 組	興味	絵本の構造・魅力	電子絵本・仕掛け絵本・サイドストーリー・絵だけ、字だけの絵本 (想像力)・紙芝居との比較
5	9 組	興味	保育者として視点を強調した絵本の分析	対象年齢との関係・読み聞かせのコツ・抑揚などの演じ方・ハッピーエンド理論・結論のない絵本
6	7 組	興味	話題の絵本・ロングセラーになる絵本	「おやすみロジャー」(4 組)
7	3 組	興味	作者の魅力	中川利枝子、五味太郎、林明子

(4) 本論で取り上げた絵本

本論では、大分類の「効果」と調査方法を示す代表例として以下の4冊を取り上げた。

1) 「すてきな三にんぐみ」³⁴⁾ (分類1)

【場面数】(見開き1ページとする。以下の絵本のページ数も同様に記す) 19ページ

【ストーリー】

主人公は、「泥棒」で、「みなしご」を救う事業をする物語である。

2) 「まっくろネリノ」³⁵⁾ (分類1)

【場面数】11ページ

【ストーリー】

きょうだいのなかで、一人だけ真黒な容姿の主人公がきょうだいを救う物語である。

3) 「よるくま」³⁶⁾ (分類2・調査方法)

【場面数】17ページ

【ストーリー】

母親がいないというくまと男の子が、一緒にくまの母親を探しながら、夢の中で冒険をする物語である。

4) 「ぐるんぱのようちえん」³⁷⁾ (分類3)

【場面数】14ページ

【ストーリー】

主人公が、様々な仕事を体験しながら、最後に自分の特性に合った仕事を見つける物語である。

6 考 察

(1) 実習後における絵本の読みなおし

明さんは、子どもの真剣な姿から、自分の準備不足を「焦った」(語り1)と反省したり、「子どもは、絵本が好きだな」(語り2)と感じ取ったりした。さらに明さんは、筆者との対話の中で、「次はこの時期に、こういうセリフを交えて、読む前の導入を変えて読んだらどうなるだろう」(語り3)と絵本との出会い直しを語っている。

絵本は、対象者へ読むという一方通行の活動ではなく、対面した身体性を伴う相互関係の中で、自分の姿を聞き手の姿から省察し直す事ができ、読み手が出会う時期や人生経験によって違った意味を伝えることができる可能性³⁸⁾をもっていると分かった。学生が絵本と出会い、子どもに読み聞かせるということは、「子ども」にとっても、「自分」にとってのその絵本の意味を理解し感じられることであると考えられる。その実体験を授業で体得するためには、友達や教員と繰り返し読むことと、対話することが必要である。その授業体

験が、絵本を深い教材研究や事前準備不要の手軽なものにとらえない学生や、絵本を用いて子どもたちや保育者との対話³⁹⁾を行う学生(次の保育者)や、絵本聞かせを安易にとらえない保育者を養成することにつながると考える。

(2) 学生の考える絵本の効果

まず、「すてきな三にんぐみ」を用いた「差別用語はいかなる場面で差別用語と定義付けられるのか」という発表事例を挙げる。学生は、言葉を受け取る対象の感性により差別用語は生まれるため、この絵本の「みなしご」は、差別用語とならず、世界各地で受け入れられているのではないかと考察した。そして、「子どもに向けて読む自分を想像しながら、言葉の学習を深め、子どもと共に差別言葉について考えたい」と発表した。

次に、「まっくろネリノ」を用いた発表では、学生はいじめを苦に自殺する子どもの新聞記事を取り上げ、「人と違うことを受け入れる」ことについて、「絵本を用いて子どもと感じ合いたい」と発表した。

次に、「ぐるんぱのようちえん」を紹介した学生は、「主人公が、いろいろな仕事をしながら、失敗する様子が、私たちの“自分は、どのような仕事ができるのか”と悩み考える姿と似ている。主人公が最後に自分の天職を見つけたように、私達もゆっくりと仕事を見つけないかと発表し、友達の共感を得た。学生が子ども期とは違う観点から絵本を読み、自己の人生と結びつけて考察した例である。

これらの学びの姿は、絵本は子どもが楽しく見るだけのものではなく、学生自身も自己の成長を期待しながら子どもと共に感じ合い読み合う効果を表していると考えられる。

(3) 絵本の構造や、読み聞かせのコツなど学生の多様な興味・関心

学生の絵本への興味・関心は、幅広く多面的であった。例えば、電子機器を操作してスムーズに電子絵本と紙絵本の比較をした発表や、「高価であり保育現場では使用されにくい」と調査し、その上で様々な仕掛け絵本を持参して魅力を伝えた発表や、販売数、売り上げ数の比較や、ロングセラー絵本の魅力などを探りに本屋に立ち寄る学生の興味も伺えた。これらの発表内容より、保育現場での集団読み聞かせのみならず、絵本には多様な活用方法があり、様々に授業内演習の工夫の余地があることが見えてきた。

(4) インターネットを活用する調査方法

学生が、絵本に出会う出会いは、幼い時に読んでもらった、教員からの紹介、インターネットや本屋の話題作であった、図書館内で表紙から見つけたなど、様々であった。さらに調査方法は、①インターネット、②アンケート、③文献、④聴き取り、⑤模擬授業であり、複数の調査方法を実施する組が多かった。

例として「よるくま」の発表を挙げる。「よるくま」についてインターネットで検索すると、①試し読み、②あらすじ、③ベストレビュー（読者の声）、④他の関連図書、⑤同じ作者の絵本、⑥動画配信などの多くの情報を約 10 分程度で簡単に把握することができる。

メディアを介して膨大な情報を手に入れることができる学生たちであるが、インターネット調査と並行して、保護者へと大学教授への聴き取り調査を行った。そして、何度も絵本のページをめくりながら、細部まで絵を見て、友達と話し、登場人物によって文章の字体が違うことを発見し、その喜びを発表した。

改めて絵本を読みという行為が人間的な身体性を伴う行為であることを確認し、繰り返し読むなどの学びの過程に時間をかける重要性と調査方法の関係に気づくことができた。発見の喜びを見いだせる授業展開を工夫したいと考える。

7 ま と め

(1) 読み聞かせと読みなおしの意味

様々な絵本との出会いをしている学生が、子どもに絵本を読むとき、子どもへ「読みながら」と、「読んだ後」に、読みなおし⁴⁰⁾ていることが明らかになった。つまり、養成校の授業では、子どもの視点と大人の視点（絵本を読む「媒介者」）とを行き来しながら、子どもにとっての意味や喜びと、自分にとっての意味や伝える役割を同時進行で学習することが必要だと考える。授業内では、絵本を深く読み、「読み聞かせたいこの 1 冊」を見つけられるような絵本との出会いや読みなおし学習の場を共に作りたい。

さらには、本研究から、学生の発表した約 60 冊の絵本について、教員も新しい出会いや読みなおしをさせてもらっていることに気付かされた。教員にとっても、大切な語りたい一冊を見つける授業を試みたいと考える。

具体案として、発表後の討議時間と、教員の講義時間の保障をしながら、1 グループ人数を増やすことで発表数を減らし、友達のグループの発表後、個人で思

考を深める時間やグループ内で話し合い、他者の意見を聴き合う時間を保障し、レスポンスペーパーに記入するなど「人と紙」を用いた実体験を重視して、1 冊の絵本から深く学べるようにする。

(2) 非効率な学習と保育の質との検証

今後も教員が絵本についての学習内容を提示するだけでなく、学生が自分の興味関心から主体的に学習を進めることを継続して大切にしたい。なぜなら、学生が、自分たちで学習教材を探すことは、小さな失敗を生む原因（図書館に行くが思うような本がない、自分はよいと思ったが、友達と話し合うと決まらないなど）にもなるが、スムーズにいかなかった経験も含めて、絵本を語ること、他者へ伝えることへつながると、学生が示したからである。学生の絵本選びから苦勞した経験が、保育の質の向上につながることへの詳細な検証を目標として取り組みたい。

また、本対象授業を実施しながら、マイクを使用した読み聞かせを行い、効率よく授業をしている自己の姿にも気付かされたため、工夫を行いたい。

(3) 絵本に関する文献の紹介

学生たちの調査方法が、圧倒的にインターネットの活用が多かった要因として①授業内での文献紹介が不足、②養成校のカリキュラムの過密さによる学生の「効率よく学びたい」と思う気持ち、③友達と意見を出し合いまとめるなどのグループワークに対する面倒さ、④授業欠席者によるネット検索と友達とのメールでのやりとりで発表内容を用意しようとする姿勢などが考えられる。

改善案として学生に絵本に関する文献を紹介し読み合い、文献から調査する喜びと繰り返し読む意味について共に考察を試みたい。

(4) 本研究の将来的展望・分析課題

学生の多様な発表内容により、保育者養成校において、絵本をどのように使用していくべきかという問いに対して、様々な将来的展望や課題が見つかった。①子どもへの集団読み聞かせに対応する基礎的技術とその習得が学生に与える自信や保育観形成との関連性、②読み聞かせと読みなおしの意義と保育の質の向上との関連性、③非効率な学び方の持つ意味の検討（例えば、インターネットを使用しない、同じ本を繰り返し読む、自分で絵本を探して友達と 1 冊の絵本を選ぶなど）、④絵本の特性と保育現場での読み聞かせ以外の

使用との関係性（電子絵本や紙芝居などとの比較や、親子支援の場での活用方法など）、⑤実習の際の保育者との読み直し、対話の実際と意義の協働検討、⑥幼少期に絵本に親しんだ経験と学習意欲の関係性などである。学生の多様な関心と学習意欲に寄り添いながら、今後一つずつ筆者の担当授業内で実施できることから検証を試みたいと考える。

補記

本論は日本臨床教育学会第6回研究大会自由研究発表(A)一般研究発表第6分科会：保育者養成と教材研究において、発表した内容「学生の絵本からの学び—保育者養成校授業における多様な絵本活用—」を加筆・修正したものである。分科会構成員に心から感謝している。

謝辞

インタビュー協力者と本授業受講者たちに心から感謝している。

注

- 1) 保育所保育指針（平成20年厚生労働省）や幼稚園教育要領（平成20年文部科学省）による言葉のねらいに、「日常生活に必要な言葉がわかるようになるとともに、絵本や物語などに親しみ、保育士等や友達と心を通わせる」とある。
- 2) 保育所保育指針解説書に「絵本や物語などに親しみ、興味を持って聞き、想像する楽しさを味わう。」とあり、絵本の重要性と同時に視聴覚教材を取り上げ、その後読み聞かせについての記載がなされている。
- 3) 英国が1992年に始めた絵本の読み聞かせ活動であり、日本でも「赤ちゃんからの絵本の読み聞かせ」という意識が全国的に広がり、CiNii（NII 学術情報ナビゲータ）で「ブックスタート」で検索すると114件の研究発表がある。
- 4) 永田桂子によると、「特に1980年代からの絵本には、①読者対象者のおとなへの広がり ②仕掛け絵本を中心にした形態加工への広がり ③図書の流通に乗らないものへの広がりを多く確認するようになった」とされる。永田桂子『絵本という文化財に内在する機能—歴史・母子関係・現代社会からの総合的考察を通して—』風間書房、2013。
- 5) 横山真紀子『絵本の読み聞かせと手紙を書く活動の研究：保育における幼児の文字を媒体として活動』風間書房、2004。
- 6) 同上 5
- 7) 近藤文里・辻元千賀子「絵本の読み聞かせに関する基礎的研究とADHD児教育への応用」『滋賀大学教育学部紀要 教育科学』第56巻、2006、pp.65-77。
- 8) 吉田ら（2007）の調査では、実習保育所で絵本を取り入れている保育所は97%であり、その時間帯は、「お昼寝前」と「昼食前」であり、「活動的な幼児の行動や気持ちを落ち着かせる手段の一つとして活用」されていることを明らかにしている。さらに、「絵本、紙芝居、パネルシアター」の3つの文化財を比較すると、「子どもとのやり取り」が最も消極的なものが絵本であり、「絵本は、絵本作者のねらいや思いを大切に、読み手のペースで進められるべき児童文化である」としている。吉田博子・藤田桂子「幼児教育における児童文化—実習保育所における児童文化の現状について—」『淑徳短期大学研究紀要』第46号、2007。
- 9) 塚本恵信・橋村晴美「絵本の読み聞かせにおける読後の対話活動—保育における言語力の育成—」日本教育心理学会 総会発表論文集第56号、2014、pp.10-26。
- 10) ①給食時、午睡時などの時間的・保育者の業務的な調整、②家庭への絵本の貸し出し、③子どもが自由に見る絵本 コーナーの設置、などが挙げられる。
- 11) 伊藤恵美・いとうたけひこ「保育者養成教育における読み聞かせ活動の位置づけ—研究論論文のタイトル・サブタイトルのテキストマイニング」『静岡県立大学短期大学部研究紀要』第27-W号、2003。
- 12) 井村圭壯・今井慶宗『障がい児保育の基礎と課題』学文社、2016、pp.66-70。
- 13) 「耳から豊かな言葉を聞く体験を深く持てば持つほど、文字を通して目から読み取る言葉に、豊かなイメージや感情や人間らしさを感じ取ることができるようになるものである。」松井直「絵本をみる眼」日本エディタースクール出版社、1978。
- 14) 松井直「絵本とはなにか」日本エディタースクール出版社、1973。
- 15) 前述 11
- 16) 小松崎進『この本大好き!』高文研、1998。
- 17) 前述 7
- 18) 松村敦・根岸舞・宇陀則彦「絵本の読み聞かせ後の問いかけが子どもの物語理解とイメージに与える影響」日本教育工学会論文誌、第38号、2014、pp.157-160。
- 19) 佐藤麻美・佐藤桃子「紙絵本とデジタル絵本による読み聞かせの比較」日本教育工学会論文誌、第37号2013、pp.49-52。
- 20) 桑名恵子「ブックスタートと絵本—絵本はこどもにどのように影響するのか 父親の読み聞かせ—」千里金欄大学紀要 第7巻、2010、pp.43-56。
- 21) 佐々木宏子・宮田喜代子・青悦美代「絵本の読み聞かせにおける読み方の研究 (1)」『日本保育学会大会研究論文集』日本保育学会、1994、pp.10-11。
- 22) 菅井洋子「絵本の読みきかせによる母子相互作用」『日本女子大学紀要・家政学部』第55巻、2008、pp.47-55。
- 23) 永田桂子 第19回絵本学会大会研究発表資料「絵本：活用の広がり—現代絵本尾有り様を考察する—」(2016)より筆者が抜粋した。
- 24) 杉本真理子「保育学生の『絵本』に関する学びの深化『保育内容の指導法(言葉)』における実践」全国保育士養成協議会 第55回研究大会 研究発表論文集、2016。
- 25) 杉浦篤子・清水貴子「絵本—読み聞かせの役割と可能性」藤女子大学人間生活学部紀要、第51号、2014、

- pp.85-98.
- 26) 藤重育子「絵本の読み聞かせ効果について-『言語指導法』受講学生の意識調査と保育現場インタビューをもとに-」東邦学誌, 第 41 巻第 3 号, 2012, pp.65-79.
- 27) 本研究対象の授業は, 保育士資格及び幼稚園教諭免許取得に関わる必須科目である。本授業は, 幼稚園教育要領に記された「幼児に育つことが期待される心情, 意欲, 態度などを『ねらい』とし, それを達成するために教師が指導し, 幼児が身に付けていくことが望まれるものを『内容』とした」, 「『ねらい』と『内容』を幼児の発達の側面からまとめた」5つの領域(健康・人間関係・環境・言葉・表現)を学ぶ演習科目の一つである。受講学生の就職職種は, 小学校, 幼稚園教諭・保育士・一般企業勤務などである。
- 28) 絵には, カンガルー, コアラ, エアーズロック, ヤシの木, アボリジニアートなどが描かれている。「みなみのしまのサンタクローズ」齊藤洋 作, 高島純 絵, 佼成出版社, 1993.
- 29) エリンコ・カサローザ 作, 堤江美 訳, 講談社, 2013.
- 30) しらかたみお 作, 絵, 新風舎, 2006.
- 31) 中川季枝子 作, 大村百合子 絵, 福音館書店, 1967.
- 32) 佐々木貴行 作, 絵, アートボックスインターナショナル, 2008.
- 33) かとうまふみ 作, 絵, フレーベル出版社, 2009.
- 34) 「すてきな三にんぐみ」トミー・アンゲラー作, 絵, 今江祥智 訳, 偕成社, 1969.
- 35) 「まっくらネリノ」ヘルガ・ガルラ 作, 絵, 矢川澄子 訳, 偕成社, 1973.
- 36) 「よるくま」酒井絢子 作, 絵, 偕成社, 1999.
- 37) 「ぐるんぱのようちえん」西内ミナミ 作, 堀内誠一 絵, 福音館書店, 1966.
- 38) 河合(2001)は, 「絵本というものは実に不思議なものである。0歳から百歳までが楽しめる。小さい, あるいは薄い本でも, そこに込められている内容は極めて広く深い。一度目ですると, それがいつまでも残っていたり, ふとしたはずみに思い出されて, 気持ちが揺すぶられる。それに, 文化の異なるところでも, 抵抗なく受け入れられる共通性をもつ。数えたとて切りがないが, それだけに絵本というものは, 相当な可能性を内蔵していると思われる。」と述べている。
- 「絵本の力」河合隼雄・松井直・柳田邦夫, 岩波書店, 2001.
- 39) 近年, 人と対話することが減っている一因として, 電子機器の普及が挙げられるが, 小川(2014)が, 3.11の影響による停電」を経験した際のことを「この停電のおかげで日ごろよりもはるかに対話が豊かになったことである。あふれる光の中ではお互いに知り尽くしているという, 既知感に支配され, お互いにコミュニケーションを交わす必要性を感じなくなっているのではないだろうか」と述べている。筆者は, 絵本を読みあう際にも学生同士がお互いの既知感を感じすぎたり, 絵本に関する情報を得すぎたりするのではないかという視点をもって考察している。「保育学研究第 52 巻 第 2 号・2014」日本保育学会編集委員会, 一般社団法人日本保育学会会長 秋田喜代美, 2014. 〈巻頭言〉より。
- 40) 柳田(2005)は, 「五十代半ばすぎに次男を喪ってから, 懐しさもあって書店の絵本コーナーに佇んだのがきっかけ」で, 大人へ絵本を勧めている。その大人になって絵本を読み直す行為について「人間がこの世に生まれ成長していく過程で出会う様々な問題について, 決してお説教調ではなく, いわば暗喩としてのお伽噺風に構成されているので, 人生後半になって自分のために読む時には, 作者の意図に思いをめぐらせながら, 深読みのたのしみを味わうことができる」と述べている。柳田邦男『言葉の力, 生きる力』新潮社, 2005, P.157.